

令和元年5月（2019年）No. 641

令和時代を迎えて

会長 合原一夫

平成時代も30年余りで遂に終わり、新しい元号、令和の時代に入った。昭和はいよいよ遠くなりけりである。

平成が始まったのは昭和64年1月7日、昭和天皇が崩御されたとき。この時のOMCニュース、No.278号に私が書いた記事がある。当時私は単身赴任で東京に勤めており、OMC例会のある第四土曜日には大阪へ帰ってくる、という生活だった。広報担当は私だったのである。この平成が始まるのに対する思いが記事にあふれていて今は懐かしい。その時のOMCニュースには当時会長だった小倉宝蔵氏が「新年に寄せて」という記事を書いておられる。それによると、今年で結成50周年を迎えました、とある。そうすると平成が30年として、令和になった年、80周年となりはしないか。おそろしく続いてきたものである。小倉さんの記事には、OMC結成時のいきさつが書かれている。OMCの歴史をたどる意味で貴重な記事である。これら記念すべき貴重なOMCニュースNo.278号を次頁と3頁に掲載し、令和時代へと引き継いでいきたい。

さて昭和時代は8ミリフィルム時代、平成時代はフィルムからアナログのテープ式、そしてデジタルの時代へ、カード方式に転換してきたが、令和の時代はどういう変化が待ち受けているのであろうか。昭和のアナログ時代に育った高齢者の私には、日進月歩の変化には到底ついていけないが、「作品」その物の価値はそうそう変わるものではないので、楽しみが全て奪われるものでもないだろう。必要最低限のパソコンの勉強をしていかなければ「編集」も出来ないのでは「作品」も出来なくなる

令和時代になったらパソコン操作が誰でも出来る簡単なものになったらいいなあと希望的期待である。

平成16年2月号No.458 OMCニュースには「ハイビジョン映像に溜息」という見出しが出ているが、令和には果たしてどんな見出しが躍るか。

5月例会のお知らせ

- 第2例会；5月16日（第3木曜日） 13時より。未完成作品等もOK
- 通常例会；5月25日（第4土曜日） 18時より。難波市民学習センター

作品のコメントを必ず書いて来て受付に渡して下さい。特に助言を要望される方はその旨記入しておいてください。

OMC News

発行 大阪ムービーサークル事務局 小倉宝蔵

大阪市大淀区長柄東2-1.21-204

'89.1 No.278

☎ (06)357-7281

★“平成元年”雑感

1月7日早朝、ラジオ体操をしようとラジオのスイッチを入れたら、天皇陛下が危篤だと言ひ、何やらあわただしい様子。出勤途上、駅の構内アナウンスで崩御されたことを知った。それから2日間、テレビ、ラジオ、新聞はそれらの関連番組のオンパレード、おかげでレンタルビデオ店が大はやりだったとか…。

私もつられて皇居前広場へと行ってきたが、記帳の列に黙々と並ぶ人、手を合わせる人、記念写真を撮る人、それらを8ミリでねらう私…。いずれももう二度と体験しないであろう出来事に何か思い出を残しておきたいという人々の思いが皇居前へ集めたのだろうと思う。

思い出多い昭和は終わった。新しい平成時代へと入った。感無量なるものがある。8ミリやっている人は前時代の昭和のオジンばかり、ということになるかも知れないが昭和の8ミリは良かった、ということも平成時代の若者たちに伝えていかなければならない。大映写の魅力は捨てるわけにはいかない。昭和の8ミリは今後もずっと守り育てていかなければならない。(合原)

★師走例会レポート

暮の17日は1週繰り上げたOMC例会の日、近鉄百貨店1回コンコースでは音楽隊が賑やかにクリスマス賛歌を奏していた。これらの曲を聞くと“今年ももう終わりか”という実感が湧いてくる。

有村氏が改正15年12月20日付の大阪毎日

新聞のコピーを持参されたが、今の天皇のご病状ニュースと同様なのに驚き、しばし話題が付きなかった。今月の出席者15名。

上映作品「柿狩り」中西康雄氏、Su H 15分。ご家族、知人らと柿狩りに車で行かれたときの記録。未編集なのでよいところを5分位に縮めて編集すればよくなる。登場人物は早目に紹介したい。またカメラを意識したカットは省きたいものだ。

「雨の中のみこし」江村一郎氏、Si H 3分半。迫力ある雨中の御輿かつぎだが現録がかすかにでも入っているとよかった。「シャボン玉」岡本至弘氏、Su T 4分。一昨年春の撮影会作品だが、再編集されて持参された。よくなっている。歌謡映画の場合、カメラが動くか対象がうごくかが、主体で止っているカットは短くしたほうが良いとは、この道のベテラン有村氏のアドバイス。「法善寺かいわい」合原一夫氏、Si H 15分。S44年作者が初めて音入れした記念すべき作品。当時の心斎橋界隈の雰囲気は伝わる。「伝統を守る人々・志摩」増田栄一氏、Su T 17分。志摩の三つの祭りをまとめられた往年の努力作。「車のない街」上総修一郎氏、Su T 20分。今年の公開映写会作品。見てない人もいたので順番に持ってくるようにとの会長の配慮で持参上映された。「白馬山麓休暇村」有村博氏、Su T 20分。15年程前のニコン入選作。心暖まる家族旅行の決定版。引き続き2次会場へ。
☆1月例会は第4土曜28日。PM6時20分～於なにわ会館。新作日作歓迎。乞多数来場

新年に寄せて

新年おめでとうございます。OMCは、今年で結成50周年を迎えることになりました。

この50年の間、小型映画の世界にも、いろいろな出来事がありました。太平洋戦争はアマチュアからフィルムを奪いましたが、戦後、ズームカメラやEEカメラの出現で、8ミリ人口が増大し、多くのクラブが次々に結成されました。そして、シングル8とスーパー8フィルムの開発は、8ミリ映画に大きなブームをもたらし、発表映写会やコンテストが盛んに行われるようになりました。しかし、残念ながらビデオカメラの普及で8ミリ映画は下り坂をたどり、カメラの生産も中止され、ほとんどのカメラ店から8ミリ機材が姿を消してしまいました。全国規模のコンテストも次々となくなり、今は「京都映像コンテスト」や「ヒロシマ国際アマチュア映画祭」等が僅かに残されているにすぎません。

また、大阪の8ミリ映画のメッカである、朝日生命ホールでの映画祭やコンテストの発表会も、一つ減り二つ減りして、エルモクラブもマスコミの注目の中で、昨年で姿を消すことになりました。今は「OMC」と「銀の会」が残るのみです。

「『完』8ミリカメラ時代」昨年11月産経新聞夕刊のトップ見出しです。こんなおり、ヒロシマ国際アマチュア映画祭事務局から届いた「映画祭だより」に、大阪発表上映会は「於 朝日生命ホール」（`89年 8月24日）とあって意を強くいたしました。

8ミリ映画を愛し、映画作りを楽しむ仲間はまだ多く、各クラブで例会が開かれています。私たちも、OMCの伝統の灯を守り、第29回OMC8ミリ映画フェスティバルが成功するよう今年も頑張りたいと思います。皆様のご協力をお願いいたします。

OMC結成の経過

昭和10年頃、故竹本正光氏は手回しの16ミリカメラで動く写真の醍醐味を味わっておられた。やがて9ミリ半のバッテリーから8ミリカメラへと移行し、ますます小型映画の虜となった竹本氏が、昭和14年、同好の仲間を集めて結成された「大阪小型映画作家集団」がOMCの前身で、この時がOMCの誕生となった。戦時中も保存のフィルムで撮影を続け、戦後いち早く小形映画作家集団を復活された。そして今は亡き、札本映光、岡本好雄、村上勇、沖中陽明氏等と、8ミリ映画の黄金時代を築きあげられた。

昭和32年、月刊誌小型映画の大阪では最初の支部、「CFC友の会南支部」として、本格的な8ミリ映画の活動が始まった。竹本正光氏は初代関西本部長に就任。初代会長に竹本氏の友人の前川氏、二代目は芦名氏。そして昭和36年に故川畑健二氏が三代目会長を受け継ぎ、クラブの発展を期して「大阪南支部」の頭文字をとって「OMC=大阪ムービーサークル」と改名、現在に至っている。昭和62年12月川畑氏が他界され、その後を私が引き継ぐことになった。（経過について、野村公威氏のご協力を頂きました）

1989年1月
（平成元年1月）

OMC会長 小倉宝蔵

丹後半島撮影会に 10 名が参加

平成最後の OMC 一泊撮影会は丹後半島の伊根、新井崎（にいぎき）、天橋立。4月13日（土曜）、午前9時40分、梅田阪急三番街の高速バスターミナルに集合。ここから乗車の江村、紙本、高瀬、中川、中村、宮崎、森田の7名（氏名50音順）が定刻に集合。バスは9時50分に出発、途中、新大阪で岡本、進藤、関の3名（同）が乗車し、今回参加の10名の顔が揃った。

バスは中国道、舞鶴若狭道、京都縦貫道と高速道路をひた走ること2時間40分、12時30分に天橋立駅前に到着。予約している



駅前の食堂「松和物産」に入り、各自思い思いの昼食で、まずは腹ごしらえ。次に乗る伊根行きの路線バスは13時44分発。発車まで30分～40分あり、食事を済ませると、食堂裏の天橋立の松林、文殊堂や小天橋、日本三景の石碑なども近く、早速カメラを回す。天気はまさに撮影会日和とっていいくらいの快晴。

海上タクシーで舟屋が並ぶ伊根湾を一周

天橋立から伊根へは路線バスで約1時間。土曜日で混雑具合が心配されたが、無事、全員が座れ、ひと安心。バスは天橋立の松林に沿って、海沿いを走る。宮津湾、阿蘇湾を巡る道の右手に日本海と遠くの島影を望む風景は丹後半島ならではのもの。景色に見惚れ、撮影などするうちにトンネルを過ぎ伊根の町に入る。舟屋が並ぶ伊根の町の細い道路を通り、2時42分「伊根」のバス停に到着。3時の乗船を予約していた舟屋めぐりの海上タクシー「成洋丸」のおネエさん？がバス停まで迎えに来られ、船着き場まで案内。

船は20人乗りだそうだが、それぞれが撮影ポジションを取ると、10人でちょうどいいくらいの広さ。「ビデオがよく撮れるように出来るだけ舟屋に近づきます」と船長に配慮して頂き、船は岸壁を離れ、時計回りの方向に一階が船の収蔵庫、二階が住居という伊根独特の舟屋230余棟が並ぶ伊根湾沿いを進む。近年、舟屋の風景は変わってきているが、中には昔ながらの木製の船が入っている舟屋もあり、伊根の情緒は残されている。なかでも映画フウテンの寅さんや釣りバカ日誌、テレビドラマ「ええにょぼ」の舞台となった一角は今も伊根の舟屋を象徴するような風景である。

ウミネコに餌をやると船に群がってくるのだが、全員、撮影に夢中でだれも餌を蒔こうとしない。そこで船長が見かねて「私が餌をやりますから皆さん撮影してください」とサービス。ウミネコを引き連れ湾内を一周、30分の伊根湾巡りを終了。ここから宿の迎いのクルマがくるまで約1時間半、思い思いに伊根の町並みを撮影する。やや日が傾きかけているが、陸からの舟屋や街並み、桜満開の海蔵寺、宝暦年間創業の向井酒造などを撮影、瞬く間に時間が過ぎた。

海の幸満載の料理にビデオ談義も盛り上がる

海沿いの漁師の宿「しばた荘」は今夜はOMCが貸し切りで、4部屋に分かれて宿泊。長時間のバスと、撮影に疲れた身体を風呂で癒し、19時から懇親会。料理は獲れない魚はないといわれる伊根の海の魚が満載された舟盛二漕をメインに、煮つけ、アンコウの鍋、サザエのつぼ焼きなど、魚づくしの料理に舌鼓を打つ。宴も

盛り上がり、話は最近のビデオ談義から8ミリフィルム時代の作品作りの苦労話など、時間が過ぎるのも忘れて賑やかに語り合った。

ただ明日の天気は予報を見る限り、丹後地方は朝から雨。そこで当初、予定していた新井崎漁港、新井崎神社の撮影は足元が悪いと危険と考え、朝一番に伊根に戻り、昼から天橋立に早めに行くことに変更。明日の朝食は8時からということで今夜はゆっくり休むこととなった。



徐福伝説の残る新井崎神社を撮影

ところが二日目の14日(日曜)の朝、5時過ぎに目を覚ますと、宿の前の海は朝焼けにうっすらと赤く染まっている。これに気付いた3~4人がカメラを持って海岸に出て、朝日がゆっくりと岩陰から昇るのを撮影。昨晚、明日は朝から雨模様と言ったため、ゆっくり寝ていて撮り損ねた方には申し訳なかったが、岩陰から昇る朝日は金色に輝き、空と海をうす紫色に染めていき、船が水平線を通り過ぎる風景は幻想的でもあった。この空を見ると、午前中はなんとか雨の心配はなさそう。新井崎神社、新井の棚田を撮影することに急きょ予定を変更。午前9時、宿の前での記念撮影を終え、宿のクルマの送りで新井崎に向かう。

新井崎神社はその昔、中国の秦の始皇帝の命を受け、日本に不老長寿の薬を探し求めて海を渡った徐福がこの地にたどり着き、帰る機会がないままここに住み、中国の文明をもたらした人々に慕われたことから成仏した後、神社に祀られたという伝説が残されている。神社は火山岩の海岸に迫り出した崖壁に建ち、徐福が上陸したハコ岩、里人が経を唱え徐福を匿った経文岩などがある。岩が折り重なる海岸には白波が打ち寄せ、彼方の海上には冠岩、杓島を望む。「京都の自然二百選」にも選ばれ、蓬莱の地にふさわしい風景をカメラに収める。この頃から空は曇り、時折、小雨も降り始めてきたが、神社から少し坂を下れば、新井崎漁港、上に行けば新井の千枚田、新井の棚田があり周囲の桜も満開で、11時の集合まで思い思いに足を運んで撮影。

当初の予定では、ここで朝妻祭りの棒振りの奉納などがあり、これを撮影と考えていたが、3月の半ば過ぎに祭りの予定が第二日曜から第三日曜に変更されたため今回、新井崎は風景だけの撮影となったのは残念。

撮影会作品コンテストは7月第2例会

新井崎の撮影が終わった頃から、小雨が続き、早々に伊根に戻り、予約してあった舟屋食堂で舟屋定食を賞味。さらに予定を早め、伊根の残りの撮影を1時間ほどに縮め、13時30分のバスで天橋立に戻ることに変更。天橋立では高速バスの出発まで2時間ほどあることから、昨日、撮影できなかった天橋立ビューランドにロープウェイで登り、有名な天橋立の股のぞきで逆さになり、龍が天に舞い上がる姿に似ているといわれる飛龍観をカメラに収めた人もいる。また大きな船が通る時、橋が回転する小天橋も運良く、回転する様子を撮影できた人もあったとかで、それぞれ趣のあるカットをモノにされたようである。

今回の撮影会、たびたびの予定変更や、宿の送迎バスが全員乗れないため二班に分かれての行動で、大変ご迷惑をおかけしたことお詫びします。大きなアクシデントもなく2日間の撮影を終え、天橋立発16時45分の高

速バスに乗り、全員、無事に家路に着くことが出来たのは何よりでした。撮影会作品のコンテストは7月18日（木）の第2例会に行います。奮って出品ください。（撮影会担当 高瀬記）

4月通常例会レポート

4月は、いよいよ平成最後の例会となった。桜咲く時期も足早に過ぎ、ここのところ日々の寒暖の差が激しいため体調管理が難しく参加者の少ない通常例会となった。風邪のため欠席となった堀世話役に代わり、岡本副会長が務めた。

関代表、岡本副会長から、「合原一夫・関 剛二人の映像リサイタル」の準備会・5月6日(月・休日)とリサイタル当日6月8日(土)の計画内容について説明があった。みなさんの協力をお願いします。

運営担当: 司会 岡本、書記 進藤、映写 中川・坪井、メモリー記録 江村、受付照明 森下・宮崎の各氏
出席者: 中川、山本、紙本、森下、進藤、高瀬、坪井、江村、合原、宮崎、中村、岡本、関の各氏 計13名

1. 近江八幡桜を訪ねて 8分30秒 中川 良三

作者コメント・去年の撮影会で、近江八幡の八幡堀の景観が印象に残り桜の時期は、きれいに見ごたえが有るのではないかと思い、訪ねてみました。

駅から新町通りを散策し近江兄弟社の創業者ウィリアム・メリル・ヴォーリズ像が目に留まりヴォーリズの功績に注目。青い目の近江商人「ヴォーリズ」の功績をたどるとともに、八幡堀の手漕ぎ舟で桜を満喫した映像を編集しました。

書記コメント・PinP で挿入した直後に当人の写真が映像としてある場合は映像のコメントにするなど、PinP は避けるのが良いと思います。この八幡堀は、ご存知の撮影スポットとして多くのカメラマンが訪れるところで、良い所に目をつけられたと思います。



2. D-DAY 7分30秒 山本 正夢

作者コメント・ノルマンデー地方は、交通の便が悪く地域が広い為に車がなければ効率よく回れません。今回は、一日でザ〜と見ただけなのでうまく紹介しきれませんでした。

書記コメント・D-DAY とは、重要な戦闘作戦開始日を表す軍事用語で、一般的には「ノルマンデー上陸作戦」開始日として使われている。こんな大きな出来事ですが、歳月がたって来ていますので初めに一言注記があった方がすつと入っていけるとと思います。とくに、ナレーションなどがない作品の場合理解を助ける力になります。それにしても、この場所の大きさ・広さや戦闘の大きさが映像を通してよく伝わります。山本さんのフットワークには頭が下がります。



3. 天滝への道 8分00分 紙本 勝

作者コメント・兵庫県下一を誇る滝は養父市にあり、落差 98M。日本の滝 100 選に選ばれた名瀑で、一度目は大雨の後で途中の川が渡れず引き返す。登山道(1.2km)沿いには、夫婦滝他多数の滝群があって、森林浴の森 100 選にも指定されている。

会場の声・急坂の続く天滝への道に繰り返して挑戦にする作者への強い意志を称える。



4. 曼荼羅ひなめぐり 12分35秒 進藤 信男

作者コメント・平成 27 年、日本遺産登録のテーマは「日本創世のとき～飛鳥を翔けた女性たち～」だったという。一方、古来からあった薬草は、四国土佐から移住した人たちが明治時代になり幕藩体制が亡くなっていく過程で、人々の生計を支えてきたという。町を挙げて行われる「ひな巡り」は、こんな環境から生まれた。

壺阪寺とメイン会場以外は全て個人家庭のもの。古物商などのものは除いて編集した。出店者たちの思いや温もりを感じられると良いのだが……。展示されている雛飾り・色紙の内容などについて、一カ所でも直接インタビューが出来ればいろいろと浮かび上がると思ったのですが、声の一部だけになったのが残念でした。



5. 奇跡の倒木桜 8分0秒 高瀬 辰雄

作者コメント・京都南区の桂川と天神川が合流する辺りの堤防に桜並木があります。

昨年 9 月の台風で 10 本の桜の木が根こそぎ倒れました。ところが、倒れ枯れたと思っていた木に満開の花が咲いたのです。まさに初めて見る奇跡の桜です。

合原会長コメント・非常に良いテーマです。倒れてもなお花をつける力強さ。地に這うように、来年もまた花をつけるかもしれない。車椅子の桜にたとえるなど人との対比をすることによりまた違った作品が描けるのではないかと。このような作品では、電子音のナレーションより作者が直接語る方が感情移入ができる。



6. よさこい菜園場 8分30秒 江村 一郎

作者コメント・土佐の高知のハリマヤ橋から東へ500m、土佐勤王党の武市半平太の道場があった菜園場。今回はここでねばりこの競演場だけでまとめる。夜になる前の夕暮れが演舞を効果的にみせる。昼間だとこうはいかない。運が良かったとしか思えない。

会場の声・「菜園場」については場所として地域の人には分かるかもしれないが、よさこいが全国的な催しになっているので、一般的に本場高知のよさこいという表現にしてはどうか。もうひとつの見方として、武市半平太の道場があった場所として、照明や映像のイメージ、踊り手も高知の他の場所で演じられるもと大きく異なっている。この地域での踊りに的を絞って編集した狙いを表すものが良いのでは・・・などがあつた。いずれも、高知のよさこいをいろいろな角度で作品にしている作者への関心の強さを表すものであつた。



7. 魅せられて嵯峨野 9分50秒 合原 一夫

撮影 平成13年(2001.11) 作者コメント・20年ぶりに訪れた嵯峨野の秋。観光客が大幅に増えていたが、日本人ばかりで外国からの観光客はほとんど見なかった。この作品は、平成13年だから、あれから更に18年、新しい元号に変わる今秋の嵯峨野の光景はどうだろうか。恐らく日本人より外国の方の観光客であふれかえっているのではなかろうか。8ミリフィルムで撮った今から38年前の^{あだしの}化野の念仏寺のろうそくで照らされ、石仏たちが浮かび上がっていたあの光景が今でも脳裏に焼き付いている。嵯峨天皇の^{りょう}陵のある丘から眺めたあたりの風景はどんなに変わっているのか、今一度あの丘に行ってみよう。もっとも今の足腰の状態ではあの丘にすら登れそうにもないが・・・。

